

## 主日礼拝説教「あなたが、あなたがたがになるとき」

日本基督教団石神井教会 2018年4月22日

### 【旧約聖書日課】レビ記 19章9～18節

<sup>9</sup>穀物を収穫するときは、畑の隅まで刈り尽くしてはならない。収穫後の落ち穂を拾い集めてはならない。<sup>10</sup>ぶどうも、摘み尽くしてはならない。ぶどう畑の落ちた実を拾い集めてはならない。これらは貧しい者や寄留者のために残しておかねばならない。わたしはあなたたちの神、主である。

<sup>11</sup>あなたたちは盗んではならない。うそをついてはならない。互いに欺いてはならない。<sup>12</sup>わたしの名を用いて偽り誓ってはならない。それによってあなたの神の名を汚してはならない。わたしは主である。

<sup>13</sup>あなたは隣人を虐げてはならない。奪い取ってはならない。雇い人の労賃の支払いを翌朝まで延ばしてはならない。<sup>14</sup>耳の聞こえぬ者を悪く言ったり、目の見えぬ者の前に障害物を置いてはならない。あなたの神を畏れなさい。わたしは主である。

<sup>15</sup>あなたたちは不正な裁判をしてはならない。あなたは弱者を偏ってかばったり、力ある者におもねってはならない。同胞を正しく裁きなさい。<sup>16</sup>民の間で中傷をしたり、隣人の生命にかかわる偽証をしてはならない。わたしは主である。

<sup>17</sup>心の中で兄弟を憎んではならない。同胞を率直に戒めなさい。そうすれば彼の罪を負うことはない。<sup>18</sup>復讐してはならない。民の人々に恨みを抱いてはならない。自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。わたしは主である。

### 【使徒書日課】ヨハネの手紙一 4章13～21節

<sup>13</sup>神はわたしたちに、御自分の霊を分け与えてくださいました。このことから、わたしたちが神の内にとどまり、神もわたしたちの内にとどまってくださることが分かります。<sup>14</sup>わたしたちはまた、御父が御子を世の救い主として遣わされたことを見、またそのことを証しています。<sup>15</sup>イエスが神の子であることを公に言い表す人はだれでも、神がその人の内にとどまってくださり、その人も神の内にとどまります。<sup>16</sup>わたしたちは、わたしたちに対する神の愛を知り、また信じています。

神は愛です。愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってくださいます。<sup>17</sup>こうして、愛がわたしたちの内に全うされているので、裁きの日に確信を持つことができます。この世でわたしたちも、イエスのようであるからです。<sup>18</sup>愛には恐れがない。完全な愛は恐れを締め出します。なぜなら、恐れは罰を伴い、恐れる者には愛が全うされていないからです。<sup>19</sup>わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです。<sup>20</sup>「神を愛している」と言いながら兄弟を憎む者がいれば、それは偽り者です。目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません。<sup>21</sup>神を愛する人は、兄弟をも愛すべきです。これが、神から受けた掟です。

### 【福音書日課】ヨハネによる福音書 13章31～35節

<sup>31</sup>さて、ユダが出て行くと、イエスは言われた。「今や、人の子は栄光を受けた。神も人の子によって栄光をお受けになった。<sup>32</sup>神が人の子によって栄光をお受けになったのであれば、神も御自身によって人の子に栄光をお与えになる。しかも、すぐにお与えになる。<sup>33</sup>子たちよ、いましばらく、わたしはあなたがたと共にいる。あなたがたはわたしを捜すだろう。『わたしが行く所あなたたちは来ることができない』とユダヤ人たちに言ったように、今、あなたがたにも同じことを言っておく。<sup>34</sup>あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。<sup>35</sup>互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。」

## 「互いに愛し合いなさい」

ここから皆さんに向かって「愛する皆さん」と呼びかけるのは何故かと、今日ばかりは、どなたからも問われることはないでしょう。聖書の御言葉から「愛の掟」をご一緒にお聞きくださった皆さん。「愛の掟」を共に学ぶようと、ひとつの教会に招き集められてこられた皆さん。「愛の掟」によって生きようと、互いに励まし合っている皆さん。その皆さんは、わたしにとって他でもない「愛する皆さん」でいらっしゃるのです。

愛する皆さんは、今日、何よりも「神を愛する者」として、ここにお集まりくださったことでしょうか。日曜日の教会は、神を礼拝するところ、神を愛する者の集まる場所です。わたしたちは、ここで、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして」神を愛する者であろうとしています。神の御前に進み出た者として、心から神を愛することができるようにと悔い改め、讃美の歌声と心の奥深くからの祈りをもって、わたしたちを赦してくださる神の恵みにお応えしようとしています。愛する神のお語りくださる御言葉を、一つも聞き逃すまいと、心を研ぎ澄ませて耳を傾けようとしています。

もちろん、皆さんの中には、そこまで深く考えていない、という方もいらっしゃるかもしれません。最近、新しく来られるようになった方もいるでしょう。習慣として来ているだけ、という方もいるでしょう。思いは強くあっても、実際にここに来て礼拝に加わったときには、心くじけて礼拝に集中できない、あるいは居眠りをしてしまう、という方だけいらっしゃるでしょう。

けれども、たとえ皆さんがご自分のことをそう思われていたとしても、わたしの目には、皆さんは、他でもない「神を愛する者たち」の一人ひとりとして映っているのです。教会の礼拝に加わらないという選択もできた日曜日の朝、皆さんは、間違いなく、神を礼拝する場に加わられていらっしゃるからです。皆さんの内心がどうであろうと、ここに共にいらっしゃるということだけで、皆さんは、「神を愛する者」に違いないのです。

いいえ、こう言うべきかもしれません。ここにいらっしゃる皆さんは、「神を愛する皆さん」である以前に、「神の愛する皆さん」、「神に愛されている皆さん」でいらっしゃる。

わたしたちは皆、日々の生活の中で、「神を愛する」ことからは離れたような毎日を送っているのです。日曜日だって、必ず教会の礼拝に来ることができるとは限らないかもしれません。わたしたちは、この世を生きていくために、「神を愛する」ことばかりにかまけてはいられないのです。そのようなわたしたちが、日曜日の朝、すべての障害を取り除けられて、ここに来ることができた。「神を愛する者」の仲間と共に、礼拝にあずかることができた。それは、皆さんが「神に愛されている」からだといふ言いがたないのではないのでしょうか。

もちろん、ここに来ることができなかつた方が神に愛されていない、ということではないでしょう。けれども、少なくとも、わたしたちは神に愛されているからこそ、ここにいらることができている。それは、真実なのではないのでしょうか。

## 「わたしがあなたがたを愛したように」

主イエスが弟子たちに「愛の掟」をお語りになられたことは、どれほどあったのでしょうか。四つの福音書をくまなく調べてみると、「愛」という言葉を用いて主イエスが教えをお語りになられている場面は、思ったほど多くはありません。それでも、あの山上の説教の中で、また、最後の一週間に神殿の境内で教えられた中で、主イエスは「愛の掟」についてお語りになられていたことを、見つけることができます。その「愛の掟」を、主イエスは、弟子たちと過ごした最後の晩の食事の席で、あらためてお語りになられたのです。今日の福音書は、その場面を伝えるものです。

主イエスは、ご自身が間もなく夜中のうちに人々に捕らえられ、裁判にかけられ、朝には十字架にかけられることになるだろうことを見越して、弟子たちに、最後の教えをお語りになられていました。まず、食事の席の用意された部屋に着いたところで、主イエスは、弟子たち一人ひとりの足をお洗いになられ、「わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示した」(ヨハネ 13:15)とお語りになられて、それから、食事を共にしながら教えを続けられたのです。その最初にまず告げられたのが、今日の福音書の伝える「愛の掟」の教えでした。

不思議なことに、このとき主イエスは、「あなたがたに新しい掟を与える」と言われました。そう告げられてから、「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」と教えられたのです。

「互いに愛し合いなさい」という教えは、ヨハネ福音書では、たしかに、ここで初めてはっきりと出てきます。けれども、他の福音書が伝えているように、主イエスは、弟子たちに対して「愛」の教えをすでに繰り返し語られていたはずなのです。宣教の初めのころ、山上の説教の中では、「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。…自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるか」(マタイ 5:44~46)とお教えになられていました。宣教の終わり、神殿の境内で教えられた時には、あの「最も重要な掟」と呼ばれる教えを、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。…隣人を自分のように愛しなさい」(マタイ 22:37~39)とお語りになられていました。「愛」の教えは、福音書が実際に伝える以上に、主イエスの一貫した教えの中心であったに違いないのです。

にもかかわらず、主イエスは、最後の晩の食事の席で、「愛の掟」を、なぜ「新しい掟」と断ってお教えになられたのでしょうか。

「わたしがあなたがたを愛したように」、この一節が、もしかすると、その理由かもしれません。主イエスは、弟子たちの足を洗われたときにも、「わたしがあなたがたにしたとおりに」とお語りになられたのです。主イエスがしてくださったとおりに、主イエスが愛してくださったとおりに、互いに愛し合う。それは、わたしたちが自然な思いで人を愛し、愛し合う、というのではない、それとは一線を画する「新しい愛の関係」を意味している、ということなのではないでしょうか。

## 「愛されるあなた」から「愛し合うあなたがた」へ

弟子たちは、それまでの主イエスとの歩みの中で、主イエスが「愛の人」であることを繰り返し見てきたことでしょう。人々に向けられた憐み深い愛の御業を間近で見てきて、弟子たちは、自分もそのような行いによって生きたいと、考えてきたのではないのでしょうか。わたしたちも、主イエスの御業を見て、同じように愛の実践に生きたいと願います。実際、二千年間、多くのキリスト者たちが、名も知られぬ者たちさえも、本当に愛の実践に人生をささげ尽くしてきたのです。それは、貴いことでしょう。わたしたちも続けたいと、切に願う者です。

けれども、そのような愛の実践を願いながらも、愛に満ちた者として生きたいと願いながらも、わたしたちは、そのことに失敗し、挫折する者でもある、というのが正直なところなのではないのでしょうか。しかも、愛に失敗し、挫折した者であることを、わたしたちは懸命に隠したり、取り繕ったり、あるいは開き直すことによって、率直に認めようとしないう者でもあるのではないのでしょうか。

それは、わたしたちが、本当には「愛」を知らないから、なのかもしれません。いいえ、知識としては「愛」を知っていても、自分自身のこととして「愛」を分かっている、自分がいかに「愛されているか」が分かっているのです。

主イエスは、弟子たちに「愛」の行為をお見せになられただけでなく、弟子たちを愛してくださったのです。主イエスは、弟子たちの足を洗われました。そして、「あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない」(13:14)とお教えになりました。けれども、それで終わりではありませんでした。主イエスは、その弟子たちを本当に愛されていることをお示しになるために、ご自分の命を弟子たちに差し出し、その手に委ねられたのです。

そのとき部屋を出て行ったイスカリオテのユダ。彼は、主イエスに「しようとしていることを、今すぐ、しなさい」(13:27)と促されて、そこから出て行ったのです。サタンがユダの中に入った、とも言われます。けれども、そのユダに、主イエスは、ご自分の命をあずけるとおっしゃられたのです。主イエスを人々の手に引き渡し、死に渡してしまうことになるユダの為すことを、止めるどころか、その背中を押されたのです。

ユダは、主イエスが捕らえられた後、自分の犯したことを悔いて、自殺したとも伝えられています。けれども、主イエスは、そのユダのことをこそ、愛されたのです。他の弟子たち同様に、愛して、この上なく愛し抜かれた(13:1)のです。

「わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです」。神の愛を、弟子たちは、何よりも主イエスを通して知るようになりました。愛するに値しないような者をさえ、命がけで愛してくださった。わたしたちは、その命をいただいた。いいえ、その命を奪った。その命を、わたしたちは、わが物のままにしておいてよいわけがないのです。いただいた命、奪った命を、今度は、与えないわけにはいかないのです。愛さないわけにはいかないのです。

神がまず愛してくださった。このわたしが、愛されている。そこから「わたしたち」の愛が始まるのです。